瀧井孝作全集

第九巻

瀧井孝作全集　第九巻
定価四八〇〇円
昭和五十四年五月十五日印刷
昭和五十四年五月二十五日発行
著者　瀧井孝作
発行者　高梨茂
印刷者　青木勇
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―八―七
電話（五六一）五九二一
振替東京二―三四
©一九七九　検印廃止

瀧井孝作全集　第九巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

天然アユ・放流アユ　一一
『名人』解説　一四
原稿を読む（三）　二〇
第三十七回芥川賞選評　二三
東府会の事　二五
島村利正君の小説　二七
スミイカ釣　三二
手マリの句　三六
原稿を読む（四）　四〇
第三十八回芥川賞選評　四三
飛騨の品漬　四五
四十年前の思出　四七
風景小説　五二
原稿を読む（五）　五四
コヒのぼり・郷愁　五八

釣の味はひ　六一
さはやかな味　六四
上質の鮎　六六
地橙孫句抄の序　七一
原稿を読む（六）　八三
第三十九回芥川賞選評　八六
『狂言記』礼讃　八八
芥川さんの墓　一〇四
近江商人を素材に世相描く　一一一
第四十回芥川賞選評　一一三
生のまま素のまま　一一五
旅を思ふ　一一九
新しい時代の祝福　一二二
原稿を読む（七）　一二四
リアルな能面　一二七
すぐれた水墨画　一三〇
寝袋　一三三
第四十一回芥川賞選評　一三八
飛驒言葉の美しさ　一四〇

荷風管見　一四一
原稿を読む（八）　一四七
春三題　一五〇
装幀楽屋話　一六一
毛筆の字　一六九
ブリ・品漬・岩梨など　一七三
春慶塗のこたつ　一七六
知恵づくのが興味津津　一八〇
第四十二回芥川賞選評　一八三
芥川龍之介遺墨　一八五
春の鯛釣　一八七
娘の就職　一九一
第四十三回芥川賞選評　二〇〇
『夕陽』編纂覚書　二〇三
悼・岡田平安堂　二〇六
小沢碧童のこと　二一〇
俳人の生活　二二二
飛驒の赤蕪　二二六
八王子小品　二三〇

第四十四回芥川賞選評　二三四
春と名人戦　二三六
第四十五回芥川賞選評　二三八
狂言の中の歌謡　二四〇
芥川賞と宇野浩二　二四五
ふくよかな筆の味　二五〇
第四十六回芥川賞選評　二五二
志賀さんの文章　二五四
室生さんを悼む　二五七
制作は発見なり　二六四
アユつりの魅力　二六七
第四十七回芥川賞選評　二七〇
街路樹　二七二
狂言の小舞　二八二
第四十八回芥川賞選評　二八五
碧梧桐忌　二八七
一本橋　二九一
第四十九回芥川賞選評　二九六
第五十回芥川賞選評　二九八

碧梧桐先生の書　三〇一
芥川賞委員三十年　三〇五
定家かづらの花　三〇九
今年の馬瀬川　三一四
第五十一回芥川賞選評　三一七
旅行の思出の句　三一九
碧梧桐の鮎の句　三二三
高山の朝市　三二六
珍至梅　三二九
庭ナナカマド　三三三
白黄の石榴の花　三三八
高山の塩煎餅　三四二
深い郷土愛にうたれる　三四六
私の本『郷愁』　三四八
『芥川龍之介遺墨』を見て　三五〇
第五十二回芥川賞選評　三五四
第五十三回芥川賞選評　三五六
「故郷」飛騨高山　三五八
生生潑剌した作品　三六一

水仙　三六九
行摩りのひと　三七三
初釣　三七六
第五十四回芥川賞選評　三七九
第五十五回芥川賞選評　三八一
世相の険悪　三八四
秋萩帖の歌　三八七
選句論　三九六
くちなしの実　四一四
第五十六回芥川賞選評　四一八
小説の読み方　四二〇
編集後記　四二七

口絵　著者（昭和二十五年、八王子）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

随筆　四

天然アユ・放流アユ

今年も、アユつりの季節になりました。

今年は、春先の二月三月に雨がすくなく、どこの川も水が枯れて、小アユの群れの海から川にのぼつてくるのが、今年はすくないやうにも思はれました。四月五月も陽気がわりに寒かつたので、すくない群れの小アユの成長もおくれるやうに思はれました。この天然アユは、今年は不作ではないかと考へられました。

天然アユは不作、あるひはおくれてゐるにしても、放流アユは、四月になつて、近江の琵琶湖で採れる小アユは、例年にない豊漁のやうで、琵琶湖から移送される放流アユは、昨年にくらべてよい調子だといはれました。この放流アユは、まづ順調のやうでした。

私共アユつり好きは、春先から天候陽気にも注意したり、また放流アユの状況も聞合せたりして、この季節を待つ例でした。

今年は、どこのつり場がよからうかと考へて、先づ、昨年行つた川のつり場が思出されるのでした。昨年は、

春先の琵琶湖の小アユ採集が不調といはれて、放流はおそく六月ごろにもなつて、それで、初のぼりの天然アユの多い川がよかつたが……。

近所の相模川は、天然アユの多い川で、東京のアユつり好きにはなじみのふかい川ですが、中流にダムが出来て、つり場の区域がせばめられて、つり人が大勢こみあふやうになりました。

相模川の上流、山梨県の桂川は、毎年放流アユの多い川で、昨年は放流がおくれて、解禁も例年よりおそく六月二十日でしたが、まだアユが小さく、この解禁は早すぎたやうでした。

私共の郷里、岐阜県の飛騨の川筋は、ダムに区切られて、山坂をトラツクで運ぶ放流アユばかりですが、七月になつてから、その成長を見さだめて解禁の例です。飛騨の馬瀬村の馬瀬川は、昨年は七月十八日に解禁して、放流の数も例年よりはすくないといはれたけれど、大きいのは早くも三十匁くらゐに成長して、私共もこの解禁にはわりに面白いつりが出来ました。この馬瀬川は、川の水がきれいでアユも良質です。

昨年は八月から九月にかけて、栃木県の鬼怒川の上流、船生村佐貫といふ在所に、一晩泊りで三度も行きました。昨年は天然アユが良くて、このあたりではこの時分に、一尾五十匁六十匁七十匁八十匁の大アユがつれたのでした。この川には放流アユも交つて、放流はおくれたので八月末に三十匁くらゐに育つて、それが倍くらゐの大きさの天然アユと共に同時につれたので、昨年は天然アユが良くて放流アユが不作といふことも、これでよくわかつたのでした。

今年の六月一日の解禁には、例の相模川はこみあふので、私共は、相模川の山一つ向ふの、中津川の半原といふ所に行きました。この中津川の半原は、石小屋といふ渓谷のすぐ下流で、水がきれいでアユも良質です。私共は毎年よく行く例ですが、今年は五月二十日の大雨とまた二十九日の雨とで、川底の石の水ゴケはあらひ流され

て、六月一日にもまだ水量が高く水の色もかすみ、川は荒れて、例の友づりはだめでした。コロガシとか瀬ザクリとかいふつり針に引つかけるつり方で、いくつかつれるアユも小さくてやせ細つて、川底に水ゴケがないのでアユの食物がなく、アユの腹をさいてみても空つぽでした。暑い日が照りこんで、川の石によい水ゴケが生えるとアユも太るのですが……。今年は発育が大分おくれてゐるやうです。

私共は永年アユつりをして、良質の大きいアユを選んでつりたい、と思ふやうになりました。アユは他の魚とちがつて、春の小アユが夏成長して秋産卵して冬は死んでしまふ、一年限りの魚で、川の石の水ゴケを食べて成長して、生ぐさくはない佳い香りがして、姿も美しい川魚です。水のきれいな山川のアユは良質ですが、水のかすんだ平野の川のアユは、腹わたに砂があつたり香りがわるいのです。実例をいふと、山梨県の富士川のアユは、大きいけれど不味ですが、その上流の釜無川のアユは香ばしく良質です。同じ上流でも釜無川に合流する塩川といふ川のアユは、大きく育つけれど不味です。これは、塩川といはれるくらゐに川の水の色も曇つてゐるからです。このやうな川の例は、全国どこにでもある例です。

今年は、天然アユは昨年よりも不作らしいが、放流アユはまづ順調のやうで、これの育つ七月八月が、まあよいかと思はれる程度です。

放流アユも、六月中の解禁には、期待がかけられません。アユは夏中日日成長するので、なるべく解禁をおそくして、大きい佳い成長を待ちたいものです。

六月の若アユはまだ食味も本当でなく、七月八月のあぶらの乗つたアユが美味で、これは天然アユも放流アユも味は同じです。

（昭和三十二年六月　朝日新聞）

『名人』解説

川端康成さんの小説「名人」は、碁の方の第二十一世本因坊秀哉名人の、晩年の姿を美しく描いた作品であります。

この小説は、フイクションではない、記録小説の方で。――それは、昭和十三年の六月から十二月にまでかけて、当時の東京日日（いまの毎日）新聞社の主催で、碁の本因坊秀哉名人と木谷実七段（当時七段で、この争碁（あらそひご）の選抜棋士）とが、名人引退碁と云はれた争碁を打つて、川端康成さんがその引退碁の観戦記を書いて、当時の新聞に連載されたが。――この「名人」といふ小説は、その当時の事柄や場面に基いて、名人の姿を描き出されたもので、当時の観戦記を書いたノオトや、はつきり見た印象や、事実の材料が豊富でそれを写し出されたものです。だから、フイクションでない事実の記録で、この作者のものとしては、例の空想の翼をまじへずに、空想の翼はおさへて抑へて、抑制してあると云へます。

しかし、小説としての観点はかなり明白に限定されて、小説の題も「名人」といふ題で、それは、只の平凡人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com